

## 異文化理解を伴うコミュニケーション能力を高める英語教育

### English Teaching to Improve Communicative Competence along with Intercultural Understanding

#### 国際語としての英語 / 異文化理解 / 積極的な発信能力

矢亀 尋美

YAKAME Hiromi

#### I. はじめに

近年、国内の諸地域でも留学や仕事等の目的ために長期滞在をする外国人が増え、また海外勤務などにより長期の海外生活経験をもつ日本人も多くなった。つまり、国内の人々の背負う文化が多様化・複雑化している傾向にある。Smith (1983, p. 10) が述べるように、言語には文化が密接に関係していることは、広く言われている。つまり、人々が言語でコミュニケーションをする際には、必ずその人々の文化が反映される。絶えず状況の変化する国際社会は言うまでもなく、国際化の進む日本社会でもお互いの文化理解を伴うコミュニケーションが求められている。文化理解という点について、米田 (1998, p. 16) によれば、異文化理解は、自文化という理解する主体の存在によって可能になること、逆に異文化への意識を抜きにしては自文化の自覚も生まれないし、自文化の独善に陥る危険をはらんでいるという。これは、言語学習上での重要な視点と思われる。

我が国の英語教育においても、言語スキルの獲得だけでなく、異文化理解の促進も従来から唱えられてきた。学習指導要領にもそうした観点が含まれ、教科書やその他の教材でも異文化は扱われている。しかし、それらは、吉田 (1995, p. 26) が指摘しているように、異文化の知的理解に役立つものの、より現実的な異文化間コミュニケーションの体験につながるとは限らないのである。つまり、具体的な異文化の取り扱い方については曖昧であり、教師の才量に任されているように思われる。今日の国際社会のニーズを満たす、実践的な文化理解を伴うコミュニケーション能力の開発こそ、日本の学習者の「使える」英語習得を促すために重視していくべきことではないだろうか。

このような視点から、筆者は、1年以上の海外勤務や海外生活経験をもつ人を対象に英語と文化に関する意識調査を実施した。このような人々は、実際に異文化間コミュニケーションを体験しているので、その回答から、英語と自文化・異文化理解の効果的な指導法に関して重要な示唆が得られるのではないかと期待したからである。

この論文では、アンケート調査結果に基づき考察を行い、自文化の自覚と異文化の理解を通じて英語のコミュニケーション能力を開発していく指導法について論じていく。

#### II. 英語と文化に関する意識調査の実施

##### A. 調査目的

国際社会あるいは異文化の中で活躍できる英語力の育成に必要な能力を調査する目的で、海外在住経験1年以上の人を対象に、英語と現地の文化に関して生じた意識の変化を調査する。経験1年以上

の人を対象とした理由は、異文化の中での長期滞在者は、短期滞在者に比べカルチャー・ショック等異文化適応に関わる経験を伴う可能性が高いと考えたからである。異文化適応に関して、西田（2000, p. 23）の指摘するように、受け入れ側文化の人々は長期滞在者に対して多くの状況でその文化での適切な行動を要求する傾向にある。そのため、長期滞在者は、カルチャー・ショックを克服し異文化適応を経験することと予想される。

## B. 調査の実施

2001 年の 8 月に、筆者の国内・外の友人・知人 35 人に無記名回答の下記内容の調査協力を、直接、あるいは書簡や電子メールで依頼した。35 人中 29 名から回答を得ることができた（回答率 82%）。調査は、無作為抽出ではないが、友人・知人による調査趣旨をよく理解した上での協力によるもので、回答の信頼性は高いと考える。

## C. 回答者経歴

1. 年齢層：全回答者 29 名のうち、20 代 2 名、30 代 21 名、40 代 6 名である。
2. 回答者の日本で英語教育を受けた年数：6 年から 13 年の範囲におよんだ。そのうち、8 年と回答したものが一番多く、13 名であった。概して、中学・高校での 6 年間と大学の 2 年間を示していると思われる。
3. 回答者の滞在国の地域別：アジア 8 カ国、アフリカ 5 カ国、ヨーロッパ 4 カ国、北米 3 カ国、南米 2 カ国、オセアニア 4 カ国である。このうち、英語を国の主要言語としているのは、14 カ国である（世界の国一覧表: 1997, pp. 10-22）。
4. 滞在年数：一カ国につき最短期間で 1 年、最長期間の者で 13 年である。滞在年は、古い者は 1981 年、新しい者は現在滞在中である。
5. 回答者の使用言語の種類：英語の他に 18 言語が挙げられた（日本語を除く）。英語を回答に挙げなかった者は 8 名である。
6. 滞在理由（あるいは目的）：海外青年協力隊（JOCV）が回答者の 62%（18 名）を占めており、主として、滞在国の官庁等の国の機関や地方自治体等の所属での勤務である。その他 38%（11 名）は留学、日本あるいは外資系企業の海外勤務、また海外勤務をする家族に同行という理由である。
7. その他：複数の海外滞在の経験のある者は 20%（6 名）である。多い者で 4 カ国。
8. 海外青年協力隊(JOCV)について：1995 年発行の青年海外協力隊概要によれば、隊員の応募資格として自ら海外協力活動に参加しようとする自発意志と奉仕精神を有し、異文化の人々と生活を共にする協調性のある者、異文化の中で協力活動を実践するのに必要な語学的素養と適応力を有する者が挙げられている。また、派遣前訓練のカリキュラムは、コミュニケーションの手段としての語学力の強化、異文化の理解と適応等の講座が含まれている。原則として、現地では、地元の人々と共に生活し働くという関わり方をするになっている。

#### D. 質問内容 (筆者作成)

1. 英語の重要性について抱いている意識は何か。(選択肢回答)  
また、その答えを選んだ理由。(自由回答)  
選択肢: a.必要不可欠な言語 b. 最も重要な言語 c.ある程度重要な言語  
d.それ程重要ではない言語 e. 全く重要ではない言語
2. 海外で英語を使ったコミュニケーションの際に気づいたことは何だったか。(自由回答)
3. 現地の事情や文化について、日本に紹介したい具体的な事柄。(自由回答)

#### E. 回答結果と内容

1. a.必要不可欠な言語: 7名 b. 最も重要な言語:3名 c.ある程度重要な言語: 18名  
d.それ程重要ではない言語: 0名 e. 全く重要ではない言語: 1名

回答者の記述を筆者が簡略化し、その主旨に従って次のように分類する。

主な理由: ( )は人数を表す。

- a 選択者 \* 世界で多くの人々がコミュニケーションの手段として使用する。(3)  
\* テクノロジーの最新情報、インターネットの世界の発信言語である。(2)  
\* 海外とのビジネス、業務上必要。(2)
- b 選択者 \* 共通語として世界で使用されている。(3)
- c 選択者 \* 英語と同様に他の言語 (母語を含む) も重要。(4)  
\* 現地の言葉を知らなくても通じる人が必ずいる共通語。(4)  
\* 英語圏での生活や英語の職業に従事しない生活には使う機会はない。(2)  
\* 国際社会の中で便利な言葉。(2)  
\* 重要というよりコミュニケーションの道具として必要。(1)  
\* 今後必要になると思う。(1)  
\* 新情報や知識を得るために仕事上必要。(1)  
\* 重要な言語。(1)  
\* 英語圏は広いから。(1)  
\* 国内でも使用され、理解できると助かる。(1)
- e 選択者 \* 英語の広まりは植民地政策の産物であり、また現在米国中心の象徴である。  
(1)
2. 回答内容は各々の主旨から判断し、筆者が次の a から d の 4 分野に分類することができた。  
その要旨と回答例 (原文のまま) を以下に示す。

a. コミュニケーション・ストラテジー

日本人は文法的な間違いを恐れず、簡単な英語で、とにかく話すことが大事である。  
わからないことは何度も尋ねる。

回答例：

- ＊ 日常会話には中学レベルの英語力で何とかできるということ。
- ＊ 文法は正確でなくともその場の状況で単語を結び付けていけば通じてしまうこと。
- ＊ 相手の言ったことがわからなくても恐れないこと。英語のネイティブでも相手の言ったことがわからないことが多くある。アメリカではとにかく発言すること。思いやりを忘れずに。気持ちは伝わる。
- ＊ あまり文法等細かい事を気にせずに臆することなく話したほうがよい。
- ＊ 日本語で考えるような難しい文を言おうとせず、簡単なセンテンスを連ね一つ一つ説明する方が相手にわかりやすい。
- ＊ はっきりと単純な単語の連続でもしゃべること。
- ＊ 黙っていてはだめなこと、目が合ったら微笑したりあいさつすること。
- ＊ わからなかったら繰り返し聞く、確認する。英語で書いてもらう。
- ＊ 分からないことはていねいに何度も聞く、分かりたいという誠意を伝える。
- ＊ 図や絵を書いて話をすると意外にわかりやすい。
- ＊ 彼らも **native** ではなく文法的な誤りはあるが、コミュニケーションは正しくできる。
- ＊ 相手も伝えよう、理解しようとしてくれるので、話そうとすることが大切。

b. 発音

非母語話者の英語の方が慣れると母語話者の英語より聞き取りやすい。  
正しく発音しないと相手に伝わらない。

回答例：

- ＊ 国によって英語の発音などそのものの違いにとまどった。
- ＊ 英語は発音が難しく、正しく発音しないと、相手に伝わらない。電話で相手の顔が見えないときに特に苦労した。
- ＊ フィリピンとミクロネシアの英語はネイティブ英語よりもずっと聞き取りやすい。
- ＊ 日本人の英語（発音）に特徴があるように、ネパール人(インド人も)の英語にも独特の癖があり、慣れるまで、何を言っているのか分かりにくかった。慣れると返ってネイティブの英語より聞き取りやすくなった。

c. 言語

英語は、地域によって独特な特徴をもっている。またコミュニケーションにはその地域で一番便利な語(英語あるいは現地語)が使われている。

回答例：

- \* 実際の会話は習っていた英語とはかなり違うこと、その国、土地ならではの表現がいろいろあること。(英国)
- \* シンガポールはいわゆる「シングリッシュ」という独特の英語が一般に話されており、自分もすぐに影響されてしまう。
- \* 英語で話をしたのは、オーストラリア人、中国人をはじめとする諸外国の人々。時折ハイソサエティの人々。 お互いにとって一番便利な言語（その他の公用語）であれば、その方が便利だった。
- \* American Peace Corps が英語でなくコスラエ語でコミュニケーションしてきたのにはショックを受けた。要は通じ合えば良いということか。

#### d. 文化

人々の喜怒哀楽の共通性、行動様式の違い、自文化中心の言語観

回答例：

- \* 広い太平洋にぽつんとある小さな島にもそれぞれの人々にとって喜怒哀楽があって大きなドラマがある。日本もミクロネシアも同じだと思った。
- \* 例えば大学院の授業中、質問をする時、日本人は授業の流れに合っているかどうか考えて、合っていなければ授業後先生に個人的に質問するが、外国人（アジア人以外）はかまわず何でも授業の流れを止めてまで質問することがある。
- \* フランスではフランス語を話すことができれば、英語は必要ないが、英語圏からの観光客は、現地の人が英語が話せて当然という感じで片言のフランス語も話さない。

#### 3. 回答を内容に従って次のように分類した。(具体的な回答例は Appendix 参照)

- a. 文化比較：生活様式、行動様式、価値観、習慣、国民気質、宗教観、食文化
- b. 文化紹介：衣食住、伝統文化、音楽、映画、スポーツ、民芸品等
- c. 諸地域の社会事情、社会情勢、民族間の関係、対日感情
- d. 人間としての共通性

### III. 考察

#### A. 質問1. 英語の重要度に関する意識について

選択 a と b を合わせて 40%の回答者が英語について「必要不可欠あるいは最重要である」と考えている。回答理由からも推察できるように、選択肢 a と b の程度の差は、個人の日常生活や仕事でどの程度英語を使用しなければならない環境にあるか、あるいはあったかによって異なるようであるが、コミュニケーションの手段としての共通語とみなしているものが主流である。また、半数以上の回答者が肯定的に「ある程度重要である」と考えている。重要性よりむしろ、コミュニケーションの道具としての必要性や利便性が指摘されている。広い視野から諸言語の中の1つとして冷静に重要性を捉えている印象である。必要性、利便性という点から考える時、本名 (1990, p. 3) によれば、世界の英

語の話し手が 20 億人に及ぶ中で、英語を母語とする人は 3 億人、国内の「第二言語」とする人は 10 億人、「外国語」として国際交流のために使用する人は 7 億人ということである。この英語使用人口からも、英語が国際コミュニケーションの道具として有用性が高いことが示されており、回答者の認識が妥当なものと確認できる。

このような回答者を英語学習者として見た時、こうした英語の重要度に対する肯定的な意識が、英語学習に対する学習意欲を高めると同時に英語運用能力の向上にもつながっていると考えられる。つまり、このような意識をもつことが英語学習に成果をもたらす一つの鍵となるのではないだろうか。

## B. 質問 2. 英語でのコミュニケーションの際に気づいたこと

ここで問われたのは、異文化の中で直接コミュニケーションの際に自覚された体験である。上記 II. E.2. で示した 4 分野における回答内容を考察する。

a) のコミュニケーション・ストラテジーでは、共通して「話すこと」に焦点が置かれていたことが特徴的である。Samovar & Porter (1995, p. 152) が、日本文化では、言葉のコミュニケーションは最小限であると述べているように、ここでは、日本人は他の文化の人々に比べると交わす言葉が少ないために、異文化の中では、たくさん「話すこと」が必要になることが表されている。これは、本名 (1993, p. 24) の述べる、日本社会が「さっし」のきく社会、つまり高文脈依存型のコミュニケーションをとる社会であることにも関連している。英語の運用能力を十分に訓練するためには、相手のコミュニケーション・ストラテジーを正しく理解する必要があると本名(1993, p.36)は指摘する。

b) の発音では、英語異種の発音を聞き取ることに慣れることと、相手に通じる発音を獲得することの必要性が指摘されている。Smith (1983, p. 8) によれば、国際語としての英語でのコミュニケーションで重点が置かれなければならないことの一つが明瞭性 (intelligibility) であり、話し手と聞き手の両者が相互に理解しあう努力をすることが必要である。発音について英語教育では、英語母語話者にできる限り近づける発音訓練をするべきかという問題がある。本名 (1993, p. 93) は、中学・高等学校の発音・文法は、中核となることを教え、生徒ひとりひとりが努力して獲得したパターンを異文化交流のなかで運用する態度を育成すべきだと主張する。必要なことは、異文化コミュニケーションの中で通じる、明瞭性を生み出す発音であり、世界の様々な地域の人々が独特な発音を確立している今日、日本人も日本人的な発音を堂々と使用してよいと考える。日本語の発音が、後になって外国語として学ぶ言語である英語に影響するのは自然なことである。また、末延 (1990, p. 283) も、日本人の発音でも文脈の中では結構聞き取れること、日本英語は、失敗を恐れず国際舞台で、その信を問うべく使っていくことで、洗練された日本英語が完成すると指摘している。したがって、学習者は、基本的な発音訓練を受けた後は、従来からの英米人の発音への憧れから脱し、多様な英語異種の発音を受け入れつつ、「日本人的な発音で自信をもって英語を使うこと」に意識を置く態度を身につけることがよいと思われる。

c) の言語については、回答者は土着の言語と文化の影響を受けた英語が使われていることに気づき、また、その土地の英語に影響を受けてしまうことも指摘されている。英語は、国際的なコミュニケーション手段であるために諸地域で多様化し、今日では、社会言語学の分野で、アジア諸国や第 3 世界

の諸地域で使用されている国内コミュニケーションの道具としての英語の研究が盛んになっている。本名 (1990, p. 19) は、英語の社会言語学的特徴についての知識があれば、その民族の使う英語とそれを使う人々に対する許容的態度が生まれるとともに、英語の多様性を肯定的に評価できると考えている。一例としてあげれば、上記 II. E c) の回答例の中にあった ‘シングリッシュ’ は、シンガポール英語のことである。多民族社会のシンガポールの国内統一言語として、異民族間のコミュニケーションの手段として英語が頻繁に使われるようになった結果、シンガポール独自の異種として人々の間に定着している (本名, 1993, p. 116)。このような英語の多様性に関する知識や情報は、日本人にとって日本人英語を使うことに自信をもてるようになり、異文化コミュニケーションを円滑に行うのに役立つと思われる。

d) の文化に関しては、「共通性」と「相違」を感じる体験が具体的に示されていた。それらは、現地の生活の中で、その土地の文化を相対的にとらえ、お互いの共通部分を認めながら相異を発見した表れである。この直接の体験こそが異文化理解につながっていく体験の一つであると考えられる。伊原 (1990, p. 40) が指摘するように、異文化理解、国際理解の根底には、国際化とは、自らのアイデンティティを失わずに、しかも異なる風俗、習慣、思考形態といった異文化を互いに認め合う営みだという認識がなければならない。さらに、この異文化理解を教育の観点から考える時、米田 (1998, p. 16) は、共生をめざす異文化理解であるためには、他者の文化を個性、価値を持った文化として相対的に捉えるという視点と、違いを越えて共通性を発見するという視点が必要であると指摘する。これら二つの視点は、自文化と他文化の理解に関わることになり、学習者自身の文化の自覚と理解を促進していく必要性があることをも気づかせてくれる。

以上、コミュニケーション・ストラテジー、発音、言語、文化についての考察を総合すると、国際あるいは異文化間コミュニケーションの際に日本人にとって重要なことは、相手とお互いの文化を認め合おうとする態度をもつとともに、臆せず日本的な英語で堂々と「話すこと」である。そのために、日本人の英語使用者は、自文化のことを相手に理解させることのできる知識と英語での表現力が欠かせない。本名 (1993, p. 40) の指摘するように、異文化間コミュニケーションでは、自分の規範を相手に順序正しく説明し、理解を求めることも重要である。また、鈴木 (1999, p. 70) の主張によれば、これからの外国語教育に必要なことは、日本に固有な事情を外国人に説明して、しかも相手を説得できる人を養成する、外向きで積極的な発信型へと重点を移すことである。以上のことから、英語教育において、異文化理解を進める際には、日本文化の自覚と、相手を説得できる積極的な発信の訓練にもっと焦点をあてていく必要があると考える。

### C. 質問3. 現地の事情や文化について紹介したい事

ここでの回答は、内容によって大きく4点に分類し、a)~c)は相違性、d)は共通性と関連している。主として回答者が現地で関心を抱いたこと、また日本であまり知られていないと思った具体的な事象が様々に挙げられているので、授業で取り上げる異文化の題材として参考になるのではないかと思う。異文化の題材に関して、伊原 (1990, p. 39) は、異文化理解教育をすすめていく条件として題材として選ぶ国を多様化することを提案している。英語学習の中で、題材を国際的に多様化することは、学

習者に英語を道具として幅広い異文化的事象を考えさせることになり、学習意欲面にも効果をもたらすと期待できる。特に開発途上の国に派遣される JOCV の回答者の直接体験のエピソードや情報はまだまだ日本で知られていないことが多いので、教育現場で生かせる機会を作ることをもっと考えても良いのではないかと思う。また、共通性を指摘した回答については、ここでは、特に具体的な体験が表されていなかったのは残念だが、質問2の4)でも1点、「人々の喜怒哀楽の共通性」があげられていることは注目できる。上記3.の質問2.でも述べたように、異文化を理解する際に相違点だけに留まらず、共通点を発見することも見逃してはならない視点であると考えからである。伊原 (1996, p. 316) の主張するように、異文化理解の方法の留意点の一つは、人間としての共通性を忘れさせることがあってはならないことである。

#### IV. 提案

ここでは、上記のアンケートの調査結果から考察されたことを授業にどのように適用していけばよいかを考えたい。つまり、授業の目的は、自文化と異文化を理解し、異文化の人々に自分のメッセージを、自分の英語で、自信をもって発信していける言語能力を養うことである。この過程には、文化という社会学的内容と、英語、コミュニケーション・ストラテジーが関わってくる。筆者は、英語を手段に内容 (Content) を学習し、コミュニケーションの場を与えていくスタイル、つまり内容に重点に置いた授業をするのが効果的ではないかと考えている。内容を重視したカリキュラムの良い点は、Chamot & O'Malley (1994, p. 26) によれば、その分野についての重要な知識を得る機会があること、その知識を使って言語機能と言語の4技能を練習できること、内容のある言語学習は、言語だけの学習以上に学習意欲が高まること、学習者に種々の学習方略を教える場を提供できることである。簡単に言うと、地理、歴史、倫社、政経、現代社会等の社会的分野を英語を使いながら教える授業ということになる。外国語科に社会的な分野を組み入れることで、題材内容だけでなく、活動・練習内容も多様化でき、興味をもって自然に英語が使いたくなるような場を提供できるのではないだろうか。通常、地理歴史や公民といった社会科の授業で行われることといえば、地図や表、ビデオ、スライドなど視聴覚教材の使用に加え、各自で、あるいは、グループ等で、情報や内容を聞きとること、参考資料を読むこと、話しあい、発表、研究レポートを書くこと等の多様な活動が含まれる。その中で文化摩擦で生じる具体的な諸問題を異文化教育の手法として開発されているロール・プレー、シミュレーション、ドラマ、ディスカッション等を通して問題の解決策を考えていく機会を与えてみてはどうだろうか。これらの活動の中で、コミュニケーション・ストラテジーにも焦点をあてながら、英語を手段として学んでいければ、これこそ、実践的な英語での異文化コミュニケーション能力を身につけることになる。

有効な教材として、例えば、鈴木 (1999, p. 118) は日本の英字新聞は、英語発信能力を高める教材として役立つと述べている。日本社会について英語で語れるようになるからである。また石川 (1995, p. 80) も授業の中で、核となるトピックを中心に新聞や雑誌の関連記事、映画、ニュース等、広く視点がもてるようにマス・メディアの英語を教材に使っているという。こうした時事的な内容は、日本語で日常的に情報が入ってくるので、背景的知識となって後で英語で学びやすくなるであろう。さらに、JOCV のような直接体験した人々からの情報も生きた教材として効果的な役割を果たすと思われる。



すでに、学校現場では、特別活動や総合的な学習の一環として、こうした体験をもつ人々を講師として招き、講演の機会を作っているところもある。このような生の声に直接触れる機会を使って、英語を手段に、上で述べた活動のように、考えたことを発言できる表現活動の場を与えると効果的であろう。

## V. 終わりに

この論文では、英語と文化に関する意識調査の結果を基に考察をしながら、文化理解とコミュニケーション能力の促進を伴う英語教育について述べてきた。言語だけに焦点をあてた教授方法では限界があり、時代は、異文化理解に留まらず、相手に理解を求めて自文化を発信することを意識した英語のコミュニケーション能力を開発していくことを要請していると思われる。今回の意識調査は、筆者の身近な者からの回答であるとともに、その回答が 29 に限られ、各々の海外経験の質・量にも幅があることが難点である。それでも、英語教育における様々な問題点を生の体験から明らかにしてくれ、示唆に富んでいたように思える。考察で指摘してきた事柄について実際の授業でどのように適用していったらよいか、上記 IV.では、大枠の授業形式の提案だけに留まってしまったが、この提案を今後に生かしていくために、具体的な活動案を示していくことができればと思う。

また、これからの英語科教師は言語・教育に関する知識だけでなく文化に関する知識の獲得など、さらに視野を広げ、資質向上を目指すことを心がけたい。社会科教師としての目を持ち、学習者に対し、最新の情報提供者の役割をも積極的に果たせるように、アンテナを張り、社会・文化面において情報を集めておくことは役に立つであろう。

(信州大学)

## 引用文献

- Chamot, A. U., & O'Malley, J. M. (1994). *The CALLA hand book: Implementing the cognitive academic language learning approach*. Reading, MA: Addison-Wesley Publishing.
- 外務省大臣官房国内広報課. (1997). 『世界の国一覧表』 東京:財団法人世界の動き社.
- 本名信行. (1990). 「アジアの英語」. 本名信行 (編著). 『アジアの英語』 (pp. 1-22). 東京: くろしお出版.
- 本名信行. (1993). 『文化を超えた伝え合いーコミュニケーションと言葉ー』 東京: 開成出版.
- 伊原巧. (1990). 「異文化理解をすすめる題材内容のあり方」『信州大学教育学部紀要』 71 号, 33-44.
- 伊原巧. (1996). 「英語科教育における国際理解教育の目的、内容、方法」『中部地区英語教育学会紀要』 第 26 号, 311-318.
- 石川慎一郎. (1995). 「異文化理解教育とマス・メディア」『英語教育』 2 月号, 80-82. 東京: 大修館.
- JICA (国際協力事業団). (1995). <http://www.jica.go.jp/activities/jocv/gaiyou/01.html>.
- 西田ひろ子(2000) 『人間の行動原理に基づいた異文化間コミュニケーション』 大阪:創元社.
- Samovar, L. A., & Porter, R. E. (1995). *Communication between cultures*. Belmont: Wadsworth.
- Smith, L. (1983). English as an international language. In L. Smith (Ed.), *Readings in English as an international language* (pp. 7-11). Oxford: Pergamon Press.

矢亀 尋美. (2003). 「異文化理解を伴うコミュニケーション能力を高める英語教育」. 『コミュニケーションと言語教育 (SURCLE) 第3号』, 1-10.

末延岑生. (1990). 「ニホン英語」. 本名信行 (編著). 『アジアの英語』 (pp. 257-286). 東京: くろしお出版.

鈴木孝夫. (1985). 『武器としての言葉——茶の間の国際情報学』. 東京: 新潮社.

鈴木孝夫. (1999). 『日本人はなぜ英語ができないか』. 東京: 岩波書店.

吉田研作(1995) 『外国人とわかりあう英語』 東京: 筑摩書房

米田伸次. (1998). 「『異文化・国際』 関連術後の整理」 『現代英語教育』 12月号, 13-17. 東京: 研究社.

## Appendix

### II.E. 回答内容

質問3. 現地の事情や文化について紹介したい事

回答例 (原文のまま):

- a)\* 日本と比べると経済的、学術的に発展途上と言わざるを得ないが彼らの持つ自然と共にファミリーで団結して生きていく知恵と力、たくましさには感動させられた。
  - \* 約800以上の部族、言語があり、現代文明に接してまだ数十年であること。原始性?
  - \* 芋を中心とした食文化と現代食のジレンマ
  - \* 多文化に対する柔軟さ。個を尊重し、それぞれの考えや好みに応じた選択肢の多さ
  - \* 習慣が日本と違う。時間があいまい。約束があまり守られない。
  - \* 生活様式: 時間の使い方、成人と子供の生活、生涯設計 (イタリア)
  - \* 障害者に対する考え方 (ザンビア)
  - \* マラウイの一般の人の日常生活、生きていく上の価値観、行動の仕方。例えば家族関係、子供を守ったり育てたりすること、仕事は何のためにしているかなど。
  - \* 考え方の違い (合理主義、個人主義) (米国)
- b)\* 最近「ザ・カップ」という同国初の映画が話題になった。(ブータン)
  - \* 伝統文化 (サカオ道)
  - \* 衣食住、民芸品、民族楽器や現地の楽器 (親指ピアノージンバブエ)
  - \* 同年代の人が何をしているか。例えば、義務教育は何年から始まるかなど。教科は何を習っているか、スポーツなど実況中継を聞くなど、興味のあるものを現地の言葉で聞くと印象深いのではないか。
- c)\* 日本人はUSAやイギリスなどに出る事が多いと思うが、フィリピンの大学に入って勉強してもかなりレベルの高い英語力が身につけられると思われる。もっとフィリピンへの留学をすすめてもいいのではないかな。思うほど途上国ではない。フィリピンには韓国からの留学生が非常に多い。理由は他国へ行くよりずっと安く英語留学ができるから。
  - \* 多民族国家における民族間の協調と緊張